

---

# 魔法少女リリカルなのは～Another Story～

来電

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは Another Story

### 【Nコード】

N8337W

### 【作者名】

来電

### 【あらすじ】

私は任務のため、未確認のロストログアを輸送中だった。

しかし、途中ロストログアが暴走し意識がなくなった。

次に目が覚めて見ると見知らぬ森のなか、体もかなり小さくなっていた。

だが、そこで一人の少女と出逢い、新しく再スタートを切ること決意した。

## 序章（前書き）

初めまして、来電と言います。

初めての投稿なのでおかしなところなどあるかと思いますが、読んでいただければ幸いです。

## 序章

ここは何処なんだろうか？

つい先ほどまで首都クラナガン近郊で未確認のロストロギア対処の最前線にいたはずだ。

未確認のロストロギアを確保し、いつも通り封印処置をし管理局に持ち帰る途中ロストロギアが暴走し意識が飛んだ。

そして次に目が覚めると、私の目の前に見知らぬ光景が目に入った。見知らぬ植物や動物などミッドチルダでは見た事の無いものばかりだった。

「ここ何処？」

それが私の第一声だった。

とりあえずここには始まらない、そう思い歩き出した。

そこで初めて自分の視点が低くなっている事に気がついた、そして首都航空隊で使用していた制服がぶかぶかであった。

仕方なく、勤務中も必須アイテムだった手鏡をポケットから取り出し、自分を見てみた。

そして驚いた、腰ほどまである金髪のロングヘアーに赤と蒼の虹彩異色、此処まではいつも通り見慣れた顔だった。

しかし、その顔は最後に見たときより遙かに幼く見えた。

そして手鏡を握る手もかなり小さいそこで初めて自分の身体が小学生並みまで縮んでいることに気がついた。

とりあえず着る物が無いのでバリアジャケットを装着する事にし、

空に上がってみた。

空に上がると、近くに町が見えたのでそこに向かうことにした。

町に着くと、まず情報収集をするため、町の人や、魔法施設などから情報入手し手持ちのお金等をこちらのお金に替え、服を買い近くのホテルに泊まった。

その日の夜、何処の誰かは知らないが、念話を使い助けを求めてきた。

夜も遅いし魔法事態が発展していないこの世界だったため勘違いかとも思ったが、何度も呼びかけて来るためベットからゆったりと起きると発信地まで向かった。

近くまでたどり着くと、大きな魔力反応を感じたため。

バリアジャケットとデバイスを着着し急いで現場に向かった。

現場にたどり着くと、明らかに素人の1人の少女が得体の知れない何かと戦っていた。

「大丈夫ですか？」

「君は？」

こちらの問いに答えたのは少女ではなく、フェレットのような生物だった。

「私はエリーゼ・フレリアとこの子は私のデバイスのガルムです、この子は寡黙な性格なので話しかけても反応しない事が多いですが、気にしないでください。」

と簡単に自己紹介をした。

「エリーゼ・フレイアってミッドの首都航空特殊部隊のエースと同じ名前なんですわね・・・あっ！申し送れました僕はユーノ・スクライア、あれは僕が発掘したジュエルシードと言うロストロギア本局に運ぶ途中事故にあってこの付近に散らばってしまったんですそれを回収するために戦っているんです、あとこちらは民間協力者の方です。」

「高町なのはです、よろしくお願いします!!」

「こちらこそよろしくお願いします。」

自己紹介していると先ほどの生物がここに向かってくるのが見えた。2人はまだ気がついていないようだったので、防御結界を張った。

「クツ！中々良い攻撃力をお持ちですね。」

防ぎながら笑顔で謎の生物に話しかけた。

「でもこの程度では私の結界は破れなませんよ・・・っと！」

結界内から飛び出しガラムで切り裂いた。

切り裂いたのは良かったがこの生物は切り裂くと同時に3匹に分裂し逃走を図り始めた。

「すみません、あちらに逃げた2匹はこちらで封印しますので、こちらは向こうに逃げた1匹をお願いします。」

「はい！」

そういい残し、エリーゼは逃げていく生物を最高速度で追った。幸いにも生物の逃走速度はそこまで速くなく、難なく追いつく事ができた。

「逃走はここで終わりにしていただきましょう。」

そう言うと1匹を一太刀封印し、もう1匹も同様に確保に成功した。確保に成功したのはと言っていた少女の方に戻ると、こちらも確保に成功していた。

「お疲れ様です、高町さん、スクライアさん。」

「同い年ぐらいだから、なのはでいいよ。」

「はぁ・・・それでは、“なのはさん”と呼ばせてもらいますね・・・  
それでは、私のことは好きなように呼んでくださいね?・・・  
それでは私はそろそろホテルに戻ります、何だか騒がしくなってきた  
んで。」

周りからはパトカー言う車のサイレンの音が聞こえ始めていた。  
初めから結界を張っていればこうなる事は無かったのだが・・・悔  
いても仕方が無いため、協力の約束をし急いでこの場を離れる事  
にした。

この日はホテルに戻りそのままベットに潜り込み眠りに落ちた。

## 序章（後書き）

いかがでしたでしょうか？

グダグダではありませんが、今後もよろしく願っています。

## 第1章 ジュエルシート集め(前書き)

第一章です。

オリジナルな部分もあるのでグダグダだと思いますが、読んでいただけると幸いです。

## 第1章 ジュエルシード集め

次の日の朝、この日は寝起きが悪かった。

普段は寝起きが良いのだが今朝は機嫌が悪かった。なぜなら、ユーノからの念話で起こされたからだ。

《・・・なんですか・・・。》

明らかに機嫌の悪そうな声で返した。

機嫌の悪さが伝わったのか心なしが声が小さく遠慮がちになった。

《今後のことで打ち合わせを・・・したいのですが・・・。》

《わかりました、それでは10時頃に海鳴臨海公園というところに来てください。》

地図を広げ場所を指定してそう言つと、時間を見てホテルの部屋を出た。

臨海公園にたどり着いたが、そこにユーノの姿は無かった。

「早く着きすぎましたか・・・。」

時計を見ると、時計は9時30分を指していた。

とりあえず公園内を散歩する事にした。

散歩し始めて10分ほどすると見た事のあるフェレットが待ち合わせ場所に居た。

《あっ！おはようございます。》

フレットモードであるため、念話で話しかけてきた。  
そこでこちらにも怪しまれないように、念話で話しかけた。

《どうも、さっそくですが・・・なのははいないんですか?》

《いえ、学校でこの会話を聞いています。》

《はい、きいてますよ。》

そこで打ち合わせが始まった、私の経緯の事やなのはが学校に言っている間の搜索はエリーゼが請け負う事、この世界の事、なのはの訓練に付き合う事など様々ことを打ち合わせした。

それから数日が経った、ジュエルシード集めは順調に進み集めたジュエルシードの数は4つとなった。

〈学校〉

お昼頃であるなら生徒でにぎやかなのであろうが、深夜にもなると一変、不気味さをもし出していた。

そこで5つ目のジュエルシードを確保したのだが、最近ではなのはの訓練も兼ねてなのは1人で確保を行っている。

ユーノやエリーゼも手伝ってはいるが、なのはの連日の戦いでかなりの疲れがみえていた。

「今日はもう遅いんで、家まで送っていきますよ。」

「だ・・・大丈夫だよ、全然・・・ユーノ君もいるし・・・。」

「いいえ、送ります。」

フラフラなのはを背負いながらなのは道案内でなのはの家に向かった。

家の前でなのはを降ろした。

「それでは、明日はお休みです、ゆっくりしてください、それから、明日は私が搜索しますのでゆっくりしてください。」

そっくり残し、ホテルに戻った。

次の日はなのはの誘いで、なのはの父である高町士郎の監督をしているサッカーチームの応援に行くことになった。

サッカーには余り興味が無かったが、教え子にどうしても頼まれたら行かざるをえないようにも感じた。

待ち合わせの場所に行くと既になのはとその友達らしき人物が立っていた。

「お待たせしました。」

「エリーゼちゃん！」

「なのはちゃんこの人が……。」

大人しそうな少女がこちらを見ながら言った。

「はい、はじめまして、エリーゼ・フレイアですよろしくお願いますね。」

「えっと、月村すずかです。」

「アリス・バニングスよ、よろしく。」

簡単に自己紹介を済ませるとサッカーが始まった。  
暫く観戦していると土郎率いるサッカーチームが勝った。

その後、お祝いで翠屋による事になった。

友人との食事は久しぶりであったからか、思いのほか楽しむ事ができた。

「そういえば、エリーゼは何処から来たの？」

そんな事を唐突に聞かれて困った。

魔法の存在知らないこの世界の住人にミッドチルダから来ましたっ  
と言っても信じてはもらえないどころか、変な目で見られるのが関  
の山だ。

「そ……それはですね……。」

「えっと、フランス……だよな？」

「……はい！そうです！」

なのはのお陰で危機を乗り越え、暫く話しているとジュエルシード  
のような気配を感じた、まだ発動していないようだ。

「ん？なのはさん、私ちよつと席を外しますね。」

「え？どうしたの急に？」

「電話です。」

微笑みながらそう言うと、翠屋を後にした。  
翠屋を出てジュエルシード特有の気配をたどって行くと、先ほどまでサツカーをしていたベンチの近くに落ちていた。

「誰かに拾われなくて良かった。」

ジュエルシードを封印しその場を後にした、しかしなのは達の待つ翠屋には戻らず、そのまま空き地に向かった。

「ここなら、問題ない・・・さて、もう出てきていいですよ、それから、何故私を追跡しているんです?」

「いつから、気付いてたんだ?」

そういいながら狼が出てきた。

普通の人なら驚いて逃げ出すところだが、生憎とこちらはこれが普通のため、驚かなかった。

「そうですね・・・ジュエルシードを拾った辺りからでしょうか?」

「ということは、初めからかい・・・。」

狼はうな垂れながら答えたが直ぐに人間型になり戦闘態勢に入った。

「さっき拾った、ジュエルシードを渡してもらおうよ!」

「それは、できません。」

にこやかに断ると、その態度が尺に触れたのか怒りだし、襲ってきた。一直線にこちらに向かって攻撃してくるため、簡単に見切る事ができ、避ける事ができた。攻撃が一向に当たらないのと、攻撃をしないで避けるに専念している事に更に腹を立てたのか、攻撃のペースがまた上がったように感じた。

「うーん、いい攻撃なんですけど・・・我を忘れて一直線になるクセがあります、次はそれを気をつけてくださいな。」

そう言うと相手の拳を掴んで投げ飛ばした。使い魔は空中で体勢を立て直し、再度こちらに襲撃をしてきた。

「空戦もできるんですか！？アナタのご主人様はかなり優秀な魔導師なんでしょうね。」

「この！ちよろちよろしやがって！」

今度はその攻撃を避けずに防御魔法である、プロテクションを張って防いだ。

「こんなもの！バリアブレイク！！」

使い魔は左手で力いっぱい魔力を込めた拳をプロテクションにたたきつけた。

するとエリーゼの張っていたプロテクションが割れたガラスの様に散った。

「あ！？」

これは流石に驚いた、その後直ぐに身体に衝撃が走った。

「あう!？」

その攻撃で数m飛び地面に落ちた。

「イタタ・・・油断したかな？昔からの悪い癖だ・・・。」

首都航空隊だった頃、同僚と模擬戦で油断して痛い一撃を貰った事を思い出した。

「ハア・・・ハア・・・さあ、大人しくジュエルシールドを渡しな！」

「嫌です。」

にこやかにそう言うと、今度は右の頬に痛みを感じ、また数m飛ばされてしまった。

口の中を切ったのか鉄の味が広がった。

「ガラムセットアップ。」

デバイスを起動させ丈の短い白のワンピースに黒いロングコートを羽織ったバリアジャケットを装着し長刀構えた。

「やっとやる気ってことかい。」

「身体強化だけでは、そろそろ限界なもので。」

エリーゼがそう言う使い魔は手加減されていた事に余計に腹を立

て怒っていたが、そんな事は無視した。

「それに、もう1人来たみたいですね。」

「えっ？」

「その人！そこにいるのはわかっています、出てきなさい。」

そう言うと、陰に隠れていた人物が出てきた。

「フェイト！？」

使い魔が驚きながらそちらを見た。

フェイトと呼ばれた人物は遠慮がちに使い間のほうに歩いてきた。

「今日は偵察だから、部屋に居てっていったじゃないか。」

「ごめんね、アルフの帰りが遅いから心配になって……。」

そう言うと使い魔に謝った、ずいぶんと腰の低いご主人様だ……とも思ったがお互いを信頼しているのだろう……と勝手に結論づけ聞いた。

「さてと、それはいいとして、何でジュエルシードを集めているの？」

するとアルフと呼ばれていた、使い魔と話していたときは打って変わり、こちらを向き冷たい表情で言った。

「多分、アナタに言っても意味が無い。」

「そう、でもジュエルシードを集めるつもりなら、私達と必ず対峙する事になる・・・それだけは覚悟しておいて。」

エリーゼはそう言い残すと、バリアジャケットを解除しこの場を後にした。

その後、口から血が出てることに気付かず、なのは達の元に戻り驚かれたが取り敢えず、ケンカしてきたとごまかし、なのは達に怒られたのは余談である。

## 第1章 ジュエルシード集め（後書き）

いかがでしたでしょうか？

作者に文才が無いので、グダグダだったとは思いますが、ここまで読んでいただきありがとうございます。

## 第2章 月村邸近郊で戦い（前書き）

第2章です。

相変わらずグダグダですが、読んでいただければ、幸いです。

## 第2章 月村邸近郊で戦い

今日はさすがに家に誘われていた。

前回、翠屋で話してから仲良くなり、誘われたわけだが。

「大きな・・・家ですね・・・。」

どうしてもミッドチルダに建て住んでいた自宅と比較してしまう、そして改めてすずかはお嬢様なのだと感じた。

まあ、私が呼ばれたのはついでだろう、今回の目的は恐らく最近疲れて元気の無いなのはを元気付けようというのが本来の目的だろう。そして何より・・・。

「猫が多いです・・・。」

猫は嫌いではないが、流石に多すぎだと思う・・・。

なのはとアリサが話す中、1人そんなことを考えていた。

ユーノが猫に追いかけられていたが気にしない。

それが庭に変わっても変わらなかつたのでユーノを摘み上げて、膝の上に乗せ非難させた。

暫くお茶会は続いたが、そこでジュエルシードの気配を感じた。

膝にいるユーノに視線を落としアイコンタクトでユーノを放し追いかける振りをしてなのはと一緒に茂みの中に入っていった。

ユーノが結界を展開しジュエルシードの反応があつた方に目を向けると、先ほどの猫が巨大化した状態で散歩していた。

幸い凶暴化していないため今回は直ぐにケリが着きそうだ。

そのとき後ろからなのはものではない、射撃魔法が巨大猫に向け飛んでいき、直撃した。

直ぐに後ろを向くと、フェイトと呼ばれていた少女が第2発目の準備をしていた。

猫はその場に倒れているので、避けようが無いだろう。

「フォトンランサー・・・ファイア!!」

そう言うと第2発目が放たれた・・・がそれは咄嗟に射線の間に入ったなのはプロテクションによって阻まれた。

「同系の魔導師・・・ロストロギアの探索者？それにバルディッシュと同系のインテリジェントデバイス。」

そう呟くと突如なのはを襲撃し始めた。

なのはは回避や防御で精一杯のようだった。

しかし、フェイトの連撃は続いた。

「なんで急にこんな・・・。」

「答えても、多分意味が無い。」

そう言うと2人は距離を取り射撃姿勢をとった、一触即発の状態が続いたが不意に目を覚ました猫に気を取られたなのはの隙をフェイトが見逃すはずも無く。

「じゅめんね・・・。」

フェイトからフォトンランサーが発射された。

なのはは直撃を覚悟し目をつむつたがいつまでたっても衝撃が来ないことを不思議に思い目を開いた。

「エリーゼちゃん!？」

「油断は禁物ですよ、アナタはユーノと協力してジュエルシードの確保に当たってください・・・彼女は私が何とかします。」

そう言うとなのはは巨大化した猫の方に向かった。

「また、アナタか・・・邪魔をしないで。」

「前に言ったでしょ？ジュエルシードを狙うなら私と対峙することを覚悟してねって。」

そう言う<sup>ガラム</sup>とデバイスを構えた。  
フェイトも<sup>バルディッシュ</sup>デバイスを構えた。

暫くにらみ合ったまま動かず構えていたがついにフェイトが動いた。その攻撃をガラムで受け流しつつ、通りすがりに足を引っ掛けた。

「あっ!？」

着地に失敗したフェイトはそのままの勢いで転んだ。

「流石にやりすぎたかな？」

倒れているフェイトに近寄りてを差し伸べた。

思いのほかフェイトは差し伸べた手をあっさり握り起き上がった。

「あ……あり……がとう……。」

最後の方が小さくて聞こえなかったが、恐らく“ありがとう”だろう。

「どういたしまして、えっと、フェイトちゃんは若干スピードに頼りすぎてる感じがあるから、そこを直して、戦略を立て直せばもっと強くなれるよ、それは保障します……そうでした、私はエリーゼ・フレイア……アナタは？」

「フェイト・テストロッサ……その瞳とそのデバイス……もしかして、ミッドチルダ首都航空隊の紅蓮のエリーゼ？」

「いいえ、違いますよ。私はただの9歳位の魔法が使える子供なので管理局の人間とは関係ありませんよ……ところでそういうアナタ……テストロッサということは、あのプレシア女史の関係者の方ですか？」

黙りこくったところを見ると恐らくそうなのだろう、深く聞くんもりは無いがとりあえず目的だけは聞くことにした。

「なんでジュエルシードを集めているの？」

「母さんを……母さんを喜ばせたいから……。」

「でも、これは知ってると思うけど立派な犯罪行為だよ？さっき戦ってた子は民間人だし。」

「それでも私は……母さんの笑顔が見たいから……。」

すると巨大猫の倒れていた方からアルフがやって来てフェイトと何かを話し飛び去っていった。

アルフの手にジュエルシードがあったことから、どうやらなのはが回収する前に強奪されたのだろう。

私は飛び去って行くフェイトたちを見ながらそんな事を考えていた。

## 第2章 月村邸近郊で戦い（後書き）

いかがでしたでしょうか？

グダグダではありますが、ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございます。

### 第3章 温泉（前書き）

第3章です。

オリジナルもところどころ入っているため、グダグダですが、読んでいただければ幸いです。

### 第3章 温泉

何故こんな事になったのだろうか？

私は車に揺られなのはの姉に質問攻めにあっていた。管理局時代に受けた対拷問訓練よりもきつく感じた。

昨日なのはの誘いで息抜きに行かないかと誘われ、なのはに指定された日数分の洋服にその他なのはの指示通りのもを持ってくるようにと念を押され、今朝、指定された時間の10分前に到着した。

「おはようございます。」

私の声に反応したなのはが直ぐに挨拶を返しこちらにやってきて、荷物を車に詰め込むと私の手を掴み車に乗車した。行き先を聞いたがなのはは話してくれなかった。

そしてなのはの姉による地獄の質問攻めが始まった、始めは名前、出身国、年齢などを聞いて来たがどんどん次から次へと立て続けに質問が続き今に至る。

それから1時間ほどがたち、車が停車した。

どうやら、目的地に着いたらしく、エンジンを切り、外に出て荷物を降ろし始めた。

それを見た私はここぞとばかりに、車のドアを開け荷物降ろしの手伝いを始めた。

なのはの父は始めは手伝わなくてもいい、と言っていたが、どうしてもやらせて欲しいと頼むと手伝わせてくれた。

荷物を降ろし終わり、そこで初めて看板を見た。  
そこには海鳴温泉と書かれていた。

「温泉ですか？」

「うん、そうだよ初めてでしょ？温泉。」

「そうですが、ジュエルシードはどうするんですか？」

「今日はエリーゼちゃんがゆっくり休む番だよ。」

その後も色々なのはに抗議してみたが頑なに休むことを進めてきたためこちらが折れる事になった。

そして中に入り、部屋に荷物を置き温泉に入る事になった。

「温泉ってどうしたらいいんですか？」

「えっと……ここで服を脱いで中で身体を洗ってから湯船につかるんだよ。」

なのはに言われたとおり服を脱ごうとすると、ユーノが居る事に気がついた。

取りあえず見つからないようにユーノをつまみ出し、服を脱いだ。

「アンタ、肌綺麗ね……。」

「あの……アリスさん、そんなに見られると恥ずかしいのですが……。」

タオルを巻いていたがまじまじと見られると恥ずかしい。  
そこでやっとユーノが居なくなっている事にアリサが気付いた。

「あれ？ユーノは？」

「先ほど外に逃げていきましたよ？」

「私が折角洗ってやろうと思ったのに・・・。」

なぜか落ち込んでいたがそこは気にしない。

浴場は足元が滑りやすくすぐ危なかったが、身体を洗い、暫く湯船に浸かっていたが、なのはたちが思いのほか洗うのが長く、先に出ることにした。

出たはいいものの、何もすることが無かったので森の方へ散歩しに行くことにした。

森を散歩していると、誰かの笑い声が聞こえ、そちらにゆっくりと気付かれないように向かった。

そこでは、なのはの父と母が何かを話していた、何かいい雰囲気をももし出していたので静かにその場を後にした。

「あんな、お父さんとお母さん・・・ちょっと羨ましいかな・・・。」

私はそこで昔のことを思い出した。

物心がついたころには既に両親はいなかった、親のいない私を引き取って育ててくれた伯父さんと伯母さんも、10歳のときにエネルギー駆動炉の暴走事故に巻き込まれて帰らぬ人となった。

私と同じ悲しみを味わう人を無くすため、12歳で管理局に入った。

しかし、入局1年目の秋に起きた執務官のミスによる、ロストロギアの暴走事故周辺に被害は無かったものの当時の指揮官、副官に加え多くの隊員が帰らぬ人となった。

そしてミスした執務官は当時1等空士だった私にミスした責任を負わせ責任を回避した。

私はそれのお陰で、遺族の方々に頭を下げる事になった、時には殴られる事もあった。

しかし、今の首都航空隊の部隊長が真実をメディアに告げ、私の無罪が証明された、しかし、隊員間では何処かギクシヤクした空気が流れていたとき、私に首都航空隊からスカウトがあった。

そのまま、首都航空隊に転属し、腕を磨き、凶悪犯逮捕、次元犯罪の事前防止、違法研究施設の摘発などの功績を残した。

その後は、首都航空隊の特殊部隊に配属になりロストロギア関連の事件をはじめ、凶悪犯罪の最前線に立ち本来の目的に一步步近づいたと思った矢先の今回の事故で、今に至る。

そんな事を考えながら部屋に戻ると、まだ誰も戻ってきていなかった。

「まだ誰もいませんか・・・。」

部屋には誰もいなかったの、なのは達を探すことにした。

浴場にもロビーにもいなかったの、取り敢えず部屋で待とうと部屋に戻るとエリーゼ以外の全員が座って待っていた。

「あ、すみません！遅れました！」

「なに、構わないさ、私たちもついさっき来たばかりだしね・・・。」

さていただくのでしょうか。」

なのはの父の合図と共に、一斉に食べ始めた。

ひととおり食べ終え、食器が片付けられると、女将さんたちがベッドを敷いてくれた、その後眠る準備をしている最中、背後に妙な気配を感じ、振り向くと顔に何が当たった。

「あう!?!」

その飛んできた物は足元に落ちた。

枕だった。

投げた犯人はアリサだろう、アリサとところだけ枕がないし、さらに後ろにいるのはアリサだけだ、なのは達は驚いていること等様々な証拠を結びつけても犯人はアリサしか考えられない。

「痛いじゃないですか!アリサ!」

「えっ!アタシじゃないわよ!」

明らかに目が泳いでいる、なんと分かりやすいことが。

「お返しです。」

そう言いながら、枕を拾いアリサに投げた。  
もちろん手加減して。

枕はアリサに直撃しまた、アリサは投げかえして来た。  
今度は警戒していたので、なんなく受けとめることができた。

なんなく受けとめられたことが悔しかったのか、アリサはなのはと  
すずかの枕を強奪し、投げて来た。

1つはキャッチできたが、もう1つは避けることしかできなかった。そして、こちらでもキャッチできた枕をアリサに投げ返し、暫く一進一退の攻防が続いたが、見かねたなのは父に怒られ枕投げ戦争は終戦を迎えた。

その日の夜、ジュエルシードの気配がしたのとほぼ同時に、なのはとユーノが出ていった。  
なのは達には遅れることを伝えた。

恐らくこの発動はフェイト・テストロツサが引き起こしたものであるため、恐らくなのはとフェイトが戦うことになるだろうと踏み、わざと遅れた。

案の定、なのはとフェイトは空戦の最中であつた。  
だが、やはりフェイトの方が速度が高く、なのははずっと押されていた。

それからものの数分もしないうちになのはの首にフェイトのデバイスの刃が突き付けられていた。

それから見上げているエリーゼに気づいたのか、レイジングハートから排出されたジュエルシードを確保しエリーゼに襲撃を仕掛けて来た。

「こちらに標的替えですか？」

「私が勝つたら、アナタの持つてるジュエルシードを渡してください。」

「確かに、私が今まで集めたジュエルシードの一部を保管していますが、渡すわけにもいきませんし、負けるわけにもいきません。」

「なら・・・仕方がない・・・行きます!!」

そう言いながらフェイトはエリーゼに攻撃した。  
エリーゼはフェイトの攻撃を受け流し続けた。

そして、隙を見計らい脛に峰打ちを食らわせた。  
薄い装甲なので、効果は絶大の筈だ。

案の定、フェイトは激痛のあまり地面で必死に痛みと戦っていた。  
暫くは黙って見ていたが、あまりにも痛そうなので、罪悪感を感じ  
治療してやることにした。

「ゴメンなさい、そこまで装甲が薄いと思わなくて・・・。」

「あの・・・ありがとうございます。」

だいたい完治したようなので、あとはなのはに任せ、未だ戦ってい  
るユーノの加勢に向かうことにした。

戦闘地点につくと、防戦一方のユーノが必死に戦っていた。

「ユーノさん、攻撃魔法覚えた方がいいんじゃないですか？」

「ハハハ、僕もつくづくそう思ったよ。」

「この状況下で、話し合いができる何てずいぶんと余裕じゃないか。」

「クシユン!・・・風邪でしょうか？」

襲ってくるアルフを受け流したり防御しながら状況を聞いた。

「わかりました、では撃墜迄はいかなくとも、最低条件として撃退ですね、善処します。」

「ごちゃごちゃとー!!」

「烈火!」

迫りくるアルフに照準を合わせ炎を剣に纏わせ、放った。燃え盛る炎槍はまっすぐアルフのもとに向かって飛んだ。

「こんなもん!狙いが甘いんだよ!」

「エクスプロード!」

アルフが避けたのを確認し、爆発させた。

そして爆煙のなかからそれなりのダメージを負ったアルフがフェイトと共に飛んでいくが見えた。

「ミッションコンプリート、これでいいんですか?ユーノさん?」

「はい、ありがとうございます、エリーゼさん、彼女達はきっとなのは成長に欠かせないと思うから。」

「まあ、少しは戦うこちらの身にもなってください。」

エリーゼは苦笑いしながら言うと、ユーノも苦笑いをした。その後、なのはと合流し、旅館の部屋に戻った。

### 第3章 温泉（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。

前回の投稿で不備がありましたため、訂正しました、大変申し訳ありませんでした。

## 第4章 なのはの訓練（前書き）

第4章です。

今回もグダグダですが読んでいただければ幸いです。

## 第4章 なのはの訓練

先日のフェイトとの戦闘で完敗した、なのはからの誘いでなのはと模擬戦をする事になった。

アルフに手傷を負わせてあるので、数日間はフェイトも動けないだろうと思いい、今回の模擬戦を引き受けた。

「あの、よろしく願いします！」

「はい、よろしく願いいたします、今回の模擬戦は素早く動く相手を拘束し、射撃する練習でもあるので、落ち着いてやってください、また、今回は実践形式なので、隙を見つけ次第攻撃ないし反撃を行います、ユーノさんの結界があるので、全力できてもらって構いませんよ・・・それでは開始としましょう。」

そして、模擬戦が始まった。

なのはの機動はかなりのムダとそれらから生じる隙が多かったため、何度でも踏み込み攻撃する事ができた。

「そこ！ダイバイン・・・。」

「遅いですよ！！！」

私はなのはの懐に潜り込み蹴りを入れた。

なのはは踏ん張り切れず、そのまま飛んで行った。

何とか踏ん張り再度射撃姿勢に入った。

「ダイバインバスター！！！」

「プロテクション。」

私はガルムを持っていない右手でプロテクションを張り、防いだ。が、思ったより威力は強かった。

その為、プロテクションにヒビが入り始めたので、急遽回避することにし、そのまま攻撃に向かった。

そして、なのはの首にガルムを突き付けた。

「今は・・・危なかったですが、私の勝ちですね・・・。」

いくつかわかったことがある、なのはの攻撃は一撃一撃が非常に強い、その為、魔力の燃費が悪い更に撃っている最中はシューターのコントロールができない。

「問題は山積みですね。」

「はい・・・。」

だがいい点もあった。

以前より機動性も良くなっていることに加え、魔法の威力に限ってはかなりあがっていた。

更に攻撃がより戦略的になっていることもあり、戦いにくさも感じた。

「今日はなのはが撃墜されて終了です。」

「ありがとうございました。」

なのはを家まで送ると、宿泊しているホテルには戻らず、市街地のデパートに向かった。

週一回の食料の買い出しのためだ。

今回のジュエルシード探索は魔導師フェイトが出現したこともあり、長期化が予測されたので、現在近くに仮住まいを借り、そこに1人で住んでいる、そのための食料だ。

「これだけ買えば大丈夫・・・でも、これだけ食べきれるかな？」

この身体になってから不便な事も多々あったが今回ばかりは得をした。

なぜなら、商店街のおばちゃんやおじさんが1人でお使いに来たものと勘違いし野菜等の食料をおまけしてくれたからだ。

子ども扱いされ少し泣きたくなかったが、まあ得をしたのでよしとする。

ある日の夜、比較的自宅の近隣でジュエルシードの反応が探知されたが反応が弱く位置の特定が難しかった。

暫く手分けして捜していると、魔力反応を感じ空を見上げた。

すると、天候が悪くなり雷の音がし始めたとはほぼ同時のタイミングでユーノの結界が展開された。

そして、若干冷や汗が出てきていた。

なぜなら、雷が苦手だからである。

上空の雷の恐怖と戦いながら、ジュエルシードの反応を待った。

そして雷が止むのと同時に、ジュエルシードが発動し、現場に急行した。

発動地点にたどり着くと、既になのはとフェイトが交戦しており、ユーノとアルフも交戦状態にあった。

ここは、なのはの特訓の成果を見るべく、観戦の姿勢をとった。

高速型のフェイトに対し今回は様々な対策をしてきた、瞬間的な加速を得ることのできるアクセルフィン、中距離攻撃のデバイスシユーター、そして間合いに入られたときのクロスレンジの訓練など様々な技と訓練をこなし、なのはは以前に比べると格段に向上しているが、まだまだ荒削りなので改善の余地はあるだろう。

始めこそ驚いていたフェイトだが徐々に本調子に戻り始め、なのはを圧倒し始めて来ている。

対するなのも喰らい着こうと必死だが実力的には明らかにフェイトのほうが上手だ。

比較的遠くからの観戦だったので、やり取りは聞こえないが突如フェイトが動いたのに対し、なのはもそれを負って行った。

そしてジュエルシードを挟み込むように2人のデバイスが交差し、次元震が起きた。

それを見たエリーゼは即座になのはの救出に向かった。

フェイトは間一髪逃げ切ったようだが、なのははかなり飛ばされてしまっている。

「大丈夫ですか？なのは。」

「うん・・・平気・・・。」

そして背後に気配を感じ振り返るとフェイトがデバイスではなく自分の手でジュエルシードの封印を行っていた。

そして、封印するとフェイトがヨタヨタと歩き始めたのを見たアルフが受け止め、こちらを睨んだ後、どこかに消えて行くのをただ見ていた。

その後はなのはを背負い、家まで送り届けた。

「それでは、今日はゆっくりと身体を休めてください。」

「うん、ありがとうエリーゼちゃん、それじゃあ、おやすみ。」

「はい、それでは。」

そう言うとなのはの家を離れ、帰路に着いた。

家に帰ると、コンビニで買ったおにぎりなどを食べお風呂に入った後、ベットに入ると疲れていたのか直ぐに眠る事ができた。

## 第4章 なのはの訓練（後書き）

ここまで、読んでくださりありがとうございます。

引き続きグダグダではありますが、皆様に読んでいただければ幸いです。

投稿に不備があったため、訂正いたしました。

## キャラクター紹介（前書き）

今回はオリジナルキャラクターのエリーゼの紹介です。

## キャラクター紹介

名前：エリーゼ・フレイア（9）

身長：120cm

魔法型式：古代ベルカ式

魔力光：紅蓮

好きなもの：ケーキ等の甘いもの、コーヒー、料理等  
嫌いなもの：雷、トマト、ニンジン等

出身世界：ミッドチルダ首都クラナガン

所属部隊：首都航空隊特殊部隊リンドブルム隊の副隊長（元）

通称：紅蓮のエリーゼ、一部の犯罪者達からは“獄炎のエリーゼ”  
と呼ばれる。

階級：3等空佐（元）

戦闘スタイル：中〜近接型、射撃等の魔法は使用できない。

容姿：腰ほどまで伸ばした金髪に整った顔立ち、赤と蒼の虹彩異色  
性格：普段は大人しく礼儀正しく敬語で話すが、ある特定人物の前  
では冷たい態度や怒りの感情を表す。

説明：とあるロストロギアの護送中、ロストロギアが暴走し身体が  
縮んでしまった、後海鳴市近くの森の中に転移させられた。

デバイス名：ガルム

形状：刀型インテリジェントデバイス

性能：ベルカ式カードリッジシステム、フルドライブシステム、魔  
力吸収システム

性格：寡黙

バリアジャケット：丈の短い白のワンピースに黒のロングコート、  
髪の毛はツインテールになる

説明：物心ついたころから身に着けていたデバイス、エリーゼ自身

何処でいつ手に入れたかわからないデバイス、エリーゼはカードリ  
ツジシステム、フルドライブシステム扱いが困難なため、未だに完  
全に扱えない。

## キャラクター紹介（後書き）

いかがでしたでしょうか？

今回はキャラクター紹介のため非常に短くなってしまいました。  
ここまで読んでくださった皆様、不定期な更新ではありますが、今  
後もよろしく願いいたします。

## 第5章 管理局の介入（前書き）

第5章です。

グダグダですが読んでいただけると幸いです・・・。

## 第5章 管理局の介入

先日の次元震によりなのはデバイス、レイジングハートが破損してしまい、使用できないのでその間はエリーゼが捜索に当たることになった。

現状動けるのはエリーゼのみなので、必然的にそうなるのだが。この日の朝エリーゼは寝坊した。

6時にかけてははずのアラームを切ってしまったためだ。

直ぐに時計を見ると、既に時間は11時30分を指していた。

「しまった！？寝坊！？」

慌てて服を着替え外に出るとさっそく広域探知魔法を使い捜索を開始した。

先日の次元震でフェイトのデバイスも恐らくかなりのダメージを負い、使えないはずであり、アルフもフェイトの看病のため動けないだろう。

暫く捜してみたが、中々見つからなかった。

そのため、今日は打ち切りにし市街地に出る事にした。

「今日も収穫なしと。」

なのはとユーノに収穫なしの報告をし、買い物をはじめた。

この日は収穫も無く、特にする事も無いので自宅に帰り、TVをつけた。

特殊な改造を施してあるため、ミッドチルダのニュースも入る。

ニュースキヤスターの女性が次々とニューズを述べて行く中、自分に関するニューズがあったので聞き入った。

「先日のロストログアの暴走によって姿を消した首都航空隊特殊部隊副隊長エリーゼ・フレイア3等空佐の捜索ですが、本日を持って捜索の打ち切りが決定しました、これは……。」

そこでTVを黙ってみていた。

捜索の打ち切り、これは特殊部隊内では任務中の死亡を意味する。実際は死亡していなくとも、何日以内に見つからなければ殉職扱いになる、特殊部隊等にはそういう決まりがある、任務は危険なものばかりで任務に行ったときと帰ってきたときの人数が違う事も多々あるからだ。

今回はそれが適用されたのだろう。

映し出される映像の中に涙を流しながら、誰も入っていない棺に向かって何かを話す元部下の姿もあった。

「何だか、罪悪感を感じる……。」

そんな事を思いながら、部屋を出た。

行き先は翠屋このケーキなどは絶品で、たまらなく美味しい、それに加えコーヒーなどもあれば文句のつけようも無いことは確かだ。注文し、暫く待つと、なのはの母が持ってきてくれた。

「エリーゼちゃんいらっしやい、生クリームとイチゴ、チョットサービスしておいたから。」

「いつもすみません、ありがとうございます。」

「はい。」

そう言うと、次の注文を受けるため他のテーブルに向かって行った。そしてケーキを食べ終わりお金を払って家に帰った。

あくる日、場所を変えて、広域探索魔法を使うと微弱ながらジュエルシードの反応があった。

現場に近かった、なのはにこのことを伝えなのはに向かわせた。

現場にたどり着くと、なのはとフェイトが一触即発の雰囲気を漂わせていた。

そして二人が動いたと同時ぐらいに中間に何者かが割り込みエリーゼとなのは、フェイトをバインドで拘束した。

「そこまでだ！時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ、全員武器を収めてくれ！話が聞きたい。」

「管理局!?!」

「クロノ?」

エリーゼは拘束していたバインドを破壊し、クロノのほうに向かって歩いていった。

フェイトやなのははまだ抜け出せずまごついていたが、気にせず話しかけた。

「クロノ、久しぶりだね、執務官になったんだ・・・あっ！リンデイさん元気?」

以前任務でお世話になった艦長を思い出し聞いた。

「君は・・・いや・・・そんなはず無いか、っと・・・とにかく全員武

器を……。」

そういいかけたクロノに向かって何か飛んできた。  
クロノはそれを防ぐと反撃の体勢に入った。

始めは撃つて来たアルフの方に照準を合わせていたが、フェイトが  
バインドを解除しジュエルシードの方に向かったので急遽そちらに  
照準を合わせ撃った。

その攻撃は、見事フェイトに命中しフェイトが倒れた。

「いい狙いだね、クロノ。」

エリーゼは後ろからクロノに言った。

驚きデバイスを向けてきたので、思わずクロノのデバイスをはじき  
飛ばしてしまった。

「なっ!?!」

「あつ、ごめんつい身体が反応しちゃって。」

飛ばしてしまったデバイスを拾い上げ、クロノに渡すと、敵対行動  
として取られたのか、誘導弾を撃つて来たが全て撃ち落とし、ながら  
敵対の意思がないことを継げたが一向に攻撃の手は止まなかった。

「ちょっと敵対の意思は無いつてば!?!」

「その手には乗らない!」

「ああ!もう!地雷槍ジライチウ!」

ガラムの切っ先を地面に突き刺すと、クロノに向かって地面から無

数岩の槍がクロノを襲ったがクロノは咄嗟に上空に逃げ、当たる事は無かった。

「クソ！なんて技だ・・・あんなの喰らったら一瞬体中で穴だらけだぞ・・・。」

「クロノ、これ以上攻撃してくるなら、次は当ててるよ？」

《もういいわ、クロノ、その人達をアースラまで連れて来てくれるかしら？》

「しかし・・・艦内で暴れられたら、僕だけじゃ取り押さえられませんかよ？」

《それでもかまわないわ、それじゃあよろしく。》

そう言うところクロノは戦闘行動を中止し、なのはとユーノ、エリーゼ達は艦内に連れて行かれた。

艦内に転送されると艦長室に通された、途中ユーノが人間の姿に戻った際になのが驚いていたのは余談である。

そしてそこには艦長である、リンディ・ハラウンが座っていた、リンディに座るように促され、座った。

「いらつしやい、それじゃあさっそく話を聞かせてもらいましょうか？何故ジュエルシードを捜しているの？」

そう聞かれるとユーノがいきさつを話し始めた。

「そう、すばらしい事ではあるけれど・・・。」

「同時に無謀でもある。」

リンディとクロノにそう言われ、シユンとするユーノ。

そしてクロノからこの件に関しては管理局が責任を持って対処をする事を約束し、なのはとエリーゼに対し今後一切かわらないように言われたがなのはたちが納得がいかないようだったので、明日答えを出す事にした。

その日の夜、エリーゼはリンディに連絡をした。

《・・・と言うわけなので、なのはたちもジュエルシード集めに参加させてもらえますか？もちろん私も協力は惜しみません。》

《動ける人が協力してくれるのは、ありがたいです、よろしくお願ひします。》

「かあさ・・・艦長！」

「切り札は最後まで温存しておきたいでしょ？クロノ執務官？」

リンディはそう言うときにこやかにクロノにそう言うとクロノは何も言えなくなった。

そして、管理局に協力する事が決まった。

## 第5章 管理局の介入（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます！

引き続き頑張って投稿していきますので、どうかよろしくお願いします。

## 第6章 共闘（前書き）

第6章です。

引き続きグダグダではありますが、読んでいただければ幸いです。

## 第6章 共闘

この日もジュエルシード搜索のため、各所を転々とした。

エイミイをはじめとした、バックアップスタッフのお陰で以前よりも早くかつ効率よくジュエルシードを確保できた。

「確保完了つと、エリーゼちゃん終わったよ！」

「お疲れ様です、なのは、この数日で見違える程に成長しましたね、バスターを撃つ姿が様になっていますよ。」

「ありがとうございます、いつもエリーゼちゃんと、クロノ君が練習に付き合ってくれるからだよ。」

お互いに微笑みあい今回の本拠地である次元航行艦アースラに帰還した。

この数日間で確保したジュエルシードの数は3つ、残りは地上を捜す限り見つからない、フェイトが確保したのであるう2つを除き、残り6つとなった。

「残りは地上ではなく、近海の海底に沈んでるかもしれないですね。・・・。」

「確かにそうだな、エイミイ探索区域を海上まで広げてくれ。」

「はいはい、了解だよクロノ君。」

後の細かい調整はクロノ達が取ってくれるだろう、そう思いブリッジを後にし、なのはたちとともに食堂に向かった。

食堂でなのはたちと話をしていると、突然アラートを告げる音とともに、放送が流れた。

それと同時に、周りの局員たちが慌しく走って持ち場に戻っていた。

エリーゼ達も食事を中断し状況を聞くためリンディの元に向かった。

「どうしたんですか？」

何も言わずに、モニターを見るようクロノに促されモニターを見た。モニターには儀式魔法を用い発動準備をしているフェイトの姿があった。

「あの子、無謀だわ。」

そしてモニターの映像にも動きがあった。

フェイトが儀式魔法を完成させ、海に向かって放った。

すると、海底から発動した6つのジュエルシードが現れた、フェイトは魔力の大半を使い果たしていたがジュエルシードに向かって突撃していった。

なのはは現場に向かおうとしていたが、クロノがそれを制した。

「放って置けば彼女は自滅する。」

「残酷に見えるけれど、これが現状。」

それでも、納得のいかないのはは、食い下がっていたがユーノからの通信で黙った。

そして転送ポートに向かって走っていった。

それを見たエリーゼは急いでなのはを追いかけ、引きとめようとし

だが間に合わず、なのはの姿が目の前から消えてしまった。

「なのは達の援護に行きます！許可をください！」

「わかりました、許可します、なのはさんの援護及び保護を優先してください。」

「了解！」

そう言うとエリーゼは転送ポートを自分で開き現場に向かった。

現場は嵐のような天候となっていた。

到着早々発動していたジュエルシードの猛攻にあったが、特に問題無くなのはたちの元にたどり着けた。

「さて、どうやって止めましょう？こんな愚かな事してくれたお陰で、私達まで尻拭いじゃないですか。」

皮肉交じりにそう言うとフェイトは黙りこくった。

それを見たエリーゼはため息をつく、真剣な表情で言った。

「さて、冗談はさておき、どうやって止めましょうか？」

「私とフェイトちゃんのフルパワーショットでなら……。」

確かに、何とかはなると思う、なのははやる気満々だが、フェイトはどこか浮かない表情をしていたが、デバイスに後押しされ決意をきめたように射撃体勢に移行した。

「それなら、私たちは竜巻が動かないように束縛しておきますね。」

そういい残すと、既に作業に当たっているユーノの援護に向かった。その後ののはとフェイトの攻撃によりジュエルシールドは全て封印が完了した。

「ば・・・馬鹿げた威力ですね・・・。」

そんな事を呟いていると、突然上空が曇りだし雷が鳴り響き始めた。暫くするととてつもなく大きな魔力を感じ、次空間攻撃だと気付いた時には既に遅く、その攻撃はフェイトに直撃した。

直撃したフェイトはそのまま墜落して言ったが、アルフが救出しジュエルシールドの方に向かってきた。

エリーゼはそれを阻止するため、アルフの肩を掴みとめた。

「なにをしてるんですか？約束と違うんじゃないですか？」

「邪魔すんなあ！！！」

「なっ!?!？」

エリーゼは腕をつかまれ後ろに吹き飛ばされたが、飛ばされ際にジュエルシールドを3つ掴んだ。

その後、アルフが再びジュエルシールドの確認し、数が減っている事に気付きこちらを見て、叫ぶと海水に魔力弾をぶつけ目くらましにし、どこかに消えていってしまった。

《エイミイさん、追尾お願いします。》

《大丈夫には大丈夫なんだけど、追尾機能がダウンしてて追尾はできなかつた、ごめんね。》

《そうですね・・・仕方ないですね。》

その後、アースラに帰還し、なのは達が怒られている間、食堂で「ヒィ」を囁っていたのは余談である。

## 第6章 共闘（後書き）

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

引き続きグダグダなストーリーが続きますが、次回も読んでいただければ幸いです。

## 第7章 発覚（前書き）

第7章です。

オリジナル部分もあるのでグダグダかと思いますが、読んでいただければ幸いです。

## 第7章 発覚

なのはたちの叱責の後、今回の主犯が判明したとのことで、フリーフィングルームに向かった。

フリーフィングでは、主犯であるプレシア・テスタロッサの事や、フェイトのことなどの説明があった。

「なるほど、そんな経緯があつたんですね。」

前に会つたときにプレシアの事は聞いており、知っていたためさほど驚きはしなかったがフェイトの出生についてはまだ推定の段階であるが驚いた。

「なのはたちには詳しい事は話していない、主犯であるプレシアの事は、大体の事は話してあるが、フェイトの出生などについては話していないから、その辺は黙っておいてくれ。」

「了解。」

そう言うと、食堂にコーヒーを飲みに向かった、この行動はすでに日課になりつつある。大魔法お使ったプレシアとその攻撃を受けたフェイトは暫くの間は動けないだろう、そういう判断からなのはたちはアースラから一時海鳴市の実家に戻る事となった。

「あら？エリーゼさん隣、いいかしら？」

「どつぞ。」

「どつかされたんですか？」

「折角だから、この機会にアナタにいくつか聞きたいことがあるんだけど？」

リンディはエリーゼの隣に座るとそう言った。

「どうぞ、答えられる範囲でお答えします。」

「ありがとう、まず始めにアナタは一体何者なの？とてもなのはさん達と同じ9歳には見えない、どこか落ち着いた雰囲気だけ。」

「確かに私は9歳ではありませんでしたが、今はなのは達と同じ9歳です。」

そう言うリンディは更に質問をしてきた。

「そう、じゃあ次の質問に移るわね？アナタの戦い方、作戦その他諸々から見て、以前管理局に入局してましたよね？」

「はい、確かに、以前は首都航空隊の特殊部隊リンドブルム隊に所属していました、何をしていたかは極秘事項なので言えません。」

「そう、それじゃあやっぱリアナタは、先日殉職されたと報じられていた、首都航空隊の特殊部隊副隊長エリーゼ・フレイア3等空佐で間違いないんですね？」

「はい、ただ私が生きている事は秘密にしておいてください、ばれると後々が面倒なので。」

そう言うリンディは頷きとても甘そうなお茶を飲みその場を立ち

去っていった。

その後は暫く部屋で休んでいたが、暇になったので海鳴市に行く事にした。

人気の無いところに降りると、取りあえず翠屋を目指した。

翠屋は相変わらずの繁盛ぶりだった。

「こんにちは。」

「いらっしやい、久しぶりね、エリーゼちゃん。」

「ご無沙汰しています・・・後、いつものヤツお願いします。」

「はい、わかったわ、ところでエリーゼちゃん学校はいいの？」

「はい、学校には通っていないので、ここにいってもなんら問題はありません。」

そう言うとケーキとコーヒーを受け取り、お金を払い席に座り開封し食べた。

相変わらずの美味しさに思わず笑みがこぼれそうになった。

全て食べ終わりごみを捨て、転送ポートに帰る途中数名の魔導師の強盗の結界に嵌ってしまった。

この世界では、魔法が認識されていないので完全に油断していた。

「ん？結界？フェイトやアルフではないようですね・・・そこに隠れている2人それから、そこで狙撃の準備をしている人出てきなさい、できれば引いていただけると穏便にことを進めれるのですが。」

「チツ！ばれたか！」

「さて、取りあえず持つてる金品とデバイスを渡してもらおうか。」

小柄な男と、リーダー格と思われる男がそう言うと、即答で断った。それを聞いた小柄な男は何か言っていたが全て聞き流し、横を素通りした。

流石にそれに腹を立てたのか、リーダー格の男がこちらに近づき方を掴んできた。

「私は暇ではないのですが？」

「うるせえ！さっさと金目のもの置いてきゃいんだよ！」

「いやです、それに、あなた方では力づくでも私を捉えることは、無理だと思いますよ？」

「ふん、そんな余裕いつまで続くかな？姉さん！よろしくお願いしますぜ！」

そう言うと比較的若そうな女性が歩いて、こちらに向かってきた。すると、リーダー格の男が女性について話し始めた。

「聞け、この方はあの管理局首都航空隊の“獄炎のエリーゼ”を倒した事のあるユニ又様だ！」

「小娘ごときが私の相手にもならんわ。」

「ほう、それは興味深い・・・“獄炎のエリーゼ”を倒したですか、面白いです、この管理局囑託魔導師エリーゼ・フレイア受けて立ち

ましよう。」

そう言うとガラムデバイスを引き抜きそう答えると、相手の顔色が変わった。

恐らく、戦闘自体は余り経験が無いのだろう、狙撃や“ユニヌ”と言つ名前を出す事で相手を威嚇して今まで金品をせしめてきたのだろう。

「来ないんですか？それからユニヌの武器は弓ではなくガンブレードでしたよ？」

「何!？」

苦笑いをするると烈火を食らわせ気絶させると、続いて後ろで逃げる準備をしていた2人の男も拘束した。

その後、アースラに転送し、アースラから強盗未遂の容疑で管理局本局に送られた。

そして、艦内に帰還すると、なのはが戦闘の準備をしていた。

「どうしたんですか？なのは。」

「今度、フェイトちゃんと本気の勝負をすることになったから、それに向けて訓練してるんだ。」

「そうですか、今度こそ彼女に良い返事をもらえるといいですね。」

「うん!」

そういうと、再びなのはは訓練ルームに入っていった。

最近はクロノやユ・ノと模擬戦を行っているようだが、その成果は

すばらしく今では推定ではあるが、フェイトとほぼ互角に戦えるであろうレベルにまで達していた。

それに、収束砲等といった新たな攻撃のバリエーションを増やし、戦略を駆使して戦う上に、1撃1撃が強力なのでなのは、近接型のエリーゼにとって戦いにくい相手である。

なのでできれば相手をしたくないが、まだまだ駆け出しの魔導師なので、隙が多い。

また、アースラ内では唯一の近接攻撃型なので、フェイトのスタイルと一番近いためよくなのはの訓練に付き合っている。

この日もなのはの訓練が終わり、部屋に戻りシャワーを浴びベットに飛び込むと、疲れていたのか直ぐに眠る事ができた。

## 第7章 発覚（後書き）

ここまで読んでくださった皆様、ありがとうございます！

引き続きこの作品を読んでいたいただきありがとうございます。  
グダグダではありますが、これからもよろしく願います。

## 第8章 決戦（前書き）

第8章です。

相変わらずグダグダですが、読んでいただければ幸いです。

## 第8章 決戦

今はなのは対フェイトの戦闘の観戦をしている。

「どちらが勝つと思います?」

「僕はなのはが勝つと思う。」

「もちろん、フェイトさ。」

「そうですね、実力はほぼ互角、どちらが勝ってもおかしくないとは思いますが、フェイトが若干優勢ですね。」

砲撃方なのは、方や近接戦闘がメインのフェイト、距離を離せば砲撃方なのはが有利だが逆に懐に入られれば近接型のフェイトが有利である。

そのため、スピードと近接攻撃が得意なフェイトが有利であった。

その証拠に始めこそ互角の勝負であったが、今ではフェイトが優勢になりつつある。

対するなのはも何か狙いがあって動いているようにも見える。

そもそも、あのクロノが今回のこの戦闘を許可するとは思わなかった。

なのはが勝てばフェイトの確保及びジュエルシードの全てを確保できる。

だが、逆に負けてしまえば、ジュエルシードは全て回収されてしまう。

負けた場合アーススタッフはフェイトの帰還先を追尾しそこに、武装局員を送り込むという算段なのだろうが、前回もアースラ自体に攻撃をされ追尾機能が落されているのに大丈夫なんだろうか？最悪の場合、ジュエルシールドを全て回収された拳句、追尾もできなかったでは話にならない、だが前回の攻撃の教訓からいくつか追尾方法を確保し雷撃対策も施されているはずなので大丈夫だと思うが・・・。

そんな事を思いつつ観戦していた。

そこで思考を中止し、戦闘の方に目を移した、すると勝負は終盤に差し掛かっていた。

既に2人は疲労困憊でどちらもあと少ししか戦えないだろう。するとフェイトが思い切つて大技を繰り出した。

その技を知っているアルフはなのはに危険を伝え、ユーノはバインドで拘束されているなのはに転送を勧めたがなのはは戦闘の継続を選んだ。

「フォトンランサーフランクスシフト！・・・ファイアー！」

何百、何千ものフォトンランサーがなのはに飛来し、シールドにあたり爆炎が上がっていた。

そして、撃ち終えたフェイトがトドメの一撃を放った。

「スパーク・・・エンド！」

1本に電気質魔力を集結させた槍をなのはに投げつけた。流石にこれで終わったと安心したのか構えを解いて成果を確認するため警戒はしながら、爆炎が晴れるのを待った。

爆炎が晴れるとそこには、バリアジャケットのところどころに直撃

し焦げた後は有るものの、未だ健全なのはの姿があつた。

それを見たフェイトは再びなのはに向かって行こうとし、予めなのはによって仕掛けられていたバインドに動きを止められた。

「デイベイーンバスター!!」

迫ってくる砲撃をシールドを展開し防いだ、幸い左手にはバインドがかかっているため、シールドを張る事ができた、しかし既に魔力は限界に近いため余り長くは持たないだろう、しかしそれはあの派にも言えることで、この砲撃さえ受けきってしまったらまだ勝機はあると、フェイトは判断した。

予想通り砲撃は直ぐに収まった。

フェイトはホツとし、落ちていくマントを見ていた。しかし、そのときフェイト周囲の異変に気がついた、周囲の魔力がどこかに集められるかのように上に上がっていつていた。

そしてフェイトが上を向くとそこには恐ろしいほどの魔力の塊があつた。

「収束砲？」

「行くよフェイトちゃん！スターライト……。」

フェイトは最後の力を振り絞って幾重にもシールド」を展開した。そして、収束砲は発射された。

「ブレイカー!!」

既に展開していたシールドは1枚また1枚とあっけなく破壊され、

ついに最後の1枚も破壊されスターライトブレイカーが直撃した。その瞬間フェイトの目の前が真っ暗になった。

なのはは撃ち終わった後、海に落ちたフェイトの搜索に移った。無事にフェイトを救出すると、近くの瓦礫の上に寝かせた。

「なのは、おめでとうございます、勝てて何よりです、さあ少し休んでください後は私たちが見ておきますので。」

そう言うとなのはも座った。

そこにユーノを呼びフェイトを治療をさせた。

すると直ぐにフェイトは目を覚ました。

なのはも直ぐに駆け寄りフェイトの身体を支えた。

「私の勝ち……だよな？」

「そう……みたいだね。」

バルディッシュを受け取るとジュエルシードを全て出した。すると再び空が曇り始め雷が鳴り始めた。

思わず足がすくみそうになるのを必死で耐えながら攻撃に備えた、誰への攻撃かわからないためである、おおむね検討は付いていたが直ぐに動けるよう、エリーゼは準備をした。

すると案の定フェイトに照準が合った。その場で呆けているフェイトを抱えそのまま着弾予想地点から離れた。

何とか直撃は避けたものの、ジュエルシードは全て回収されてしまった。

「エイミーさん！追尾お願いします！！」

無事追尾が成功し、居場所の特定に成功した。

武装局員が庭園内部に突入しプレシアを発見し拘束するために行動する部隊と家宅搜索する部隊に分かれた。

エリーゼ達は、それを艦内のモニターから見ていた。

そして搜索隊が突入し中であつたものに驚いた。

無数の生体ポッドが並んでおり、一番奥にある生体ポッドの中にはフェイトに良く似た少女が入っていた。

フェイトより幾分か幼いがフェイトそのものといつても過言ではないほどそっくりであつた。

「なるほど、あの人物がアリシア・テスタロッサですか。」

その後、プレシアが武装局員を襲撃、投げ飛ばしトドメの雷撃を食らわせ、武装局員は壊滅させられてしまったため、全員アースラに転送された。

そして、庭園内に傀儡兵が召喚された。

「傀儡兵とは・・・少々厄介な物を持っていますね。」

傀儡兵の魔法ランクは概ねAランク、一般の管理局員では話にならないだろう。

だが、魔法ランクが高ければ高いほど、強いというわけではないのだが傀儡兵は装甲が硬く、攻撃力もある、1体倒すだけでも結構辛い。

そんなものを数百体も召喚してくれたのだ、いちいち相手をしてい

てはこちらの身が持たない。

現状動ける戦力はクロノ、エリーゼ、なのは、ユーノ、アルフとなつてしまったため、出撃することになった。

フェイトもいるのだが、先程プレシアに拒絶され、崩れ落ち心を閉ざしてしまっているので恐らく戦えないだろう。

「さて、行きますか？」

「ああ、あのままプレシアを放っておくわけにはいかない。」

そして庭園内に突入した。

## 第8章 決戦（後書き）

ここまでこのグダグダな小説を読んでいただき、ありがとうございます。  
ます。

ここまで読んでくださった皆様、今後もよろしくお願いいたします。

## 第9章 終結（前書き）

第9章です。

相変わらずのグダグダな文ですが、読んでいただければ幸いです。

## 第9章 終結

庭園内に入るとさっそく傀儡兵が襲い掛かって来たがクロノが撃退し、クロノの指示でなのはとユーノは駆動炉の封印、クロノとエリーゼはプレシアの確保に向かうことになった。

「それでは、なのは気をつけてくださいね？」

「うん！エリーゼちゃんもね！」

そういつてなのはとユーノと分かれた。

そしてホールに残るのはクロノとエリーゼの2人になった。

「私が前に出ます、援護お願いしますよ、クロノ執務官？」

「了解、任せてください！」

そう言うと風の流れるようにしなやかに突撃していった。

途中何体か切り裂き先に進んでいった。

「地雷槍じらいこう！」

デバイスを地面に突き刺すと刺した地面から一直線に土でできた槍が傀儡兵を貫いていった。

貫かれた傀儡兵は皆同様に動かなくなった。

すると敵の増援が現れた。

「ぞろぞろと！烈火！砕け散れ！」

そう言うと真つ直ぐ火球が飛んで行き敵の中心部まで到達したところで爆発させ傀儡兵を粉々にした。

それを呆れたようにクロノは見えていたが直ぐに次の行動に移った。

「ん〜久々の全力全壊は気持ちいい！それじゃ、次に行きましょう？」

若干字が違うような気がしたが、言ったら傀儡兵同様粉々にされてしまいかもしれないので、黙っておいた。

「はい！行きましょう！」

その後も傀儡兵の襲撃や待ち伏せなどにもあつたが、クロノとともに全て蹴散らし進んだ。

奥に進めば進むほど傀儡兵が大きくそして防御も硬くなってきていたが、まだまだ許容範囲である。

途中桜色と金色の魔力が目の前を通過していったときは流石に驚いた。

更に奥に進むと硬そうな傀儡兵が3体佇んでいた。

流石に3体の相手は厳しいので1体をクロノに任せ、エリーゼは2体の相手をする事にした。

「クロノは一番右のヤツをお願いします、私は中央と左のヤツを相手にします。」

「了解！」

そう言うとクロノは意気揚々と飛び出して行った。

ここまで大きいと流石に刃は通らなだろうと判断し、魔法重視で

戦う事にした。

「灼熱斬！」

デバイスに高熱を持たせ、切り裂いた。

装甲はバターの解けるように切り落とされ、コアの部分が露出した。そこにデバイスを突き立てた。

すると巨体が揺らぎ崩れていった。

もう1体も同様に撃破した頃クロノも手傷を負いながらも何とか敵の撃破に成功した。

「お疲れ様です、クロノ。」

「何とかになりました。」

壊れた壁のほうを見るとプレシアが確認できた。

それをクロノも確認し、向かった。

既にフェイトが到着しており、リンディが次元震を抑えながら念話で何かを話していた。

「・・・そして、取り戻すのこんなはずじゃなかった、全ての世界を！」

「そうですね、全てを取り戻す・・・ですか、だからと言って他人を巻き込んでいいなんて理由は何処にもありません、後、私事なのですが、アナタ達が昔起こした事故、覚えていますよね？あの時アナタの娘である、アリシア・テストロツサは亡くなった、そのとき駆動炉で必死に最後まで暴走を止めようとして亡くなった2人の研究員をご存知ですか？」

「・・・フレイア夫妻の事？」

「そうです、私を育ててくれた伯父さんと伯母さんです、何故あの時2人を放って真つ先に逃げ込んだんですか？当時止められたのは責任者であったアナタだけでしょう！」

そこで一度冷静になるため話しを切った。

「それに聞くとところによれば、アナタはその後自分の事しか行っていない、巻き込まれた私の伯父さん達への謝罪も無い・・・どういうことでしょうか？」

「でも、既にフレイア家はこの前死亡した、エリーゼを最後に誰もいなくなった、だから誰にも謝罪する事はできないじゃない、それにあの事故は私のせいじゃない！本社から派遣されてきたスタッフの安全管理不足よ。」

「そういえば、自己紹介がまだでしたね、はじめましてプレシア・テスタロッサ、私の名前はエリーゼ・フレイア前所属部隊は首都航空隊の特殊部隊に所属し最終階級は3等空佐です。」

そこで初めて自己紹介をした。

そしてデバイスを構えた。

「そして、さようなら。」

今までに感じたことの無いさつきを感じたクロノは咄嗟に幾重にもバインドで拘束した。

「何をするんですか！放しなさい！アイツのせいで伯父さん達は！」

「ダメです、あくまでプレシア・テスタロッサの確保が目的です、殺してはいけません！」

未だに暴れる私に見かねたクロノはアルフに何かを頼むと同時に鳩尾に衝撃が走り意識を失った。

その後の事は覚えていないが、聞いた話では当然現れたユンヌという女性がプレシアの確保に成功、そして何かを使いアリシア・テスタロッサを復活させたという事だ。

クロノもプレシアを転送した後、事情を聞こうとしたところ攻撃を受け、1撃でダウンしてしまったようだ。

その後、フェイトとアルフの証言によるとそのユンヌはどこかに消えていってしまったとの事。

プレシアとも話し合い、謝罪をしてもらう事で和解した、そんな事で伯父さん達が許すかどうかかわからないが、ともかく当時の状況と謝罪がもらえたので完全にとまではないが許す事にした。

そして主犯である、プレシアの逮捕によりジュエルシード事件は幕を閉じた。

## 第9章 終結（後書き）

ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

ここでようやく無印編が終了です。

次回はオリジナルになるのでグダグダになるかと思いますが、読んでいただけるのなら幸いです。

## 第10章 新たな戦いの狼煙（前書き）

第10章です。

オリジナルな部分などが多々あるためグダグダだと思いますが、読んでいただければ幸いです。

## 第10章 新たな戦いの狼煙

ジュエルシード事件が終わり、なのはとフェイトも友達になった。事件が終わったので、なのははアースラから降り地球の自宅に戻っている。

私は事件の後暇をもてあましていたが、体調の悪いプレシアとアリスアの護送のため、ミッドチルダに来ていた。

「久しぶりですね。クラナガンはやっぱり落ち着きます。」

プレシア達の護送が終わり1日の休みが与えられたので、エリーゼは町に繰り出した。

そこでアイスクリームや昔足しげく通ったお店に行き久しぶりのクラナガンを満喫した。

そして郊外にある共同墓地に向かった。

伯父さんと伯母さんに今回の事件の終了を報告するためだ。

墓地に着くと、伯父さん達のお墓の横にもう1つお墓が増えている事に気がついた。

そこに刻まれていたのは自分の名前だった。

「ここにあつたんだ。」

以前から死んだときは伯父さん達のお墓の横に埋めて欲しいと頼んでいたが、本当に横に埋めてくれたらしい。

暫く懐かしんでいると、遠くから首都航空隊の見慣れた制服を来た隊員が数名やって来た。

「こんにちは。」

「フレイア3佐!？」

以前私の部下だった隊員たちだった、聞けば週に一回はここに訪れ自身の成果報告をしていたらしい。

「そうですか、姉はそんな人だったんですか。」

「はい!私なんかには到底勤まらない大役を任されていた・・・本当に立派な方でした、今回はフレイア3佐の代わりに副隊長に任命されたので、その報告に。」

近くのカフェに立ち寄り妹と素性を偽り話をした。

他のお客から見ると、首都航空隊の副隊長代理が子供と話しているというおかしな事になっている。

「それでは私はこれで、今私は囑託魔導師としてアースラに身を置く身です。」

そう言うと代金をそこにいた隊員全員分を密かに払いカフェを後にした。

そして、アースラに戻った。

「ただいま、戻りました。」

「お帰りなさい、エリーゼさん護送お疲れ様でした。」

「はい、無事にクラナガンの病院に送り届けてきました。」

そう言うと、リンディから今後はアースラ、ミッドチルダ、地球間を自由に行き来してもいいと許可がもらえたため、次の日からさっ

そく地球に向かった。

フェイトの裁判もほぼ全て終わり、その報告も兼ねて、地球のなのは家に遊びに行く事にした、また、今日は日曜なので、なのはの家を訪ねた。

「こんにちは、なのは居ますか？」

「はーい！今行きます！あっ、エリーゼちゃんかーって何でここに！？」

「無事に任務が終わり、暫くは暇なので遊びにきました。」

にこやかにそう言うと、なのはも笑顔を返してくれた。

なのはの部屋でおしゃべりや昔の失敗談や部隊の事などを話していると、あっという間に日が暮れてしまった。

「それから、最近この辺でリンカーコアの魔力を抜かれるって言う事件が多発しているみたいなので意をつけた方がいいですよ、まあ、なのはなら多少の相手、赤子の手を捻るより簡単でしょうけど。」

すると、周りが結界に包まれた。

何だか、とても嫌な予感がしたため外に出た。

「こっちにきてますね・・・真っ直ぐ、例の襲撃犯でしょうか？」

「かも知れないね。」

「今年は厄年なのでしょうか？なぜこつても事件に巻き込まれるのでしょうか？」

なのはは苦笑いをしていたが、すぐに顔が真剣になった。敵の攻撃が来たからだ。

「大丈夫ですよ、私がやります。」

「でりゃああー!!」

振り向きざまに、ガラムで合わせつばぜり合いになった。力は強いがさほど気にならないレベルだ、なのはなら力負けしていたかもしれない。

「チィ！アイゼン！カードリツジロード！」

一度つばぜり合いを止め襲撃者はデバイスにそう命じると空薬莖に似た弾丸のようなものがデバイスから排出された。そして再度攻撃してきた襲撃者の攻撃が突然威力を増した。

「まさか・・・これは！？クッ！！」

攻撃を防いだものの、かなり遠くまで飛ばされてしまった。

「中々良い打撃力をお持ちで・・・。」

「オメー頑丈すぎんだろ？ビル2つ貫通してんのになんでそんな余裕そうなんだよ！」

「恐らく一般人方々とは鍛え方が違うのでしょう。」

エリーゼは笑いながらそう言うとガラムを構えなおした。

「見たところベルカの騎士見たいなので、あまり使ったことはありませんが・・・ガルム、カードリッジロード！」

エリーゼがそう命じるとガルムは無言で従い空薬莖を1発排出した。それと同時に、ガルムは鞆に収まった。

「ヘッ！そんなことしたって無駄だ！ラケーテン・・・ハンマー！  
！」

「それは・・・どうでしょう？氷床壁！」  
氷床壁

突っ込んでくる襲撃者に対し分厚い氷でできた壁を出現させた。襲撃者はそれに気付き、急制動をかけていたがその努力も虚しく氷の壁に激突した。

「束縛！」

ぶつかった襲撃者の身体を氷付けに動きを封じた。

「さ・・・さすがだね、エリーゼちゃん私、何もしてないのに捕まえちゃった。」

「畜生！何者なんだテメーは！」

「ただの9歳の魔導師ですよ？逆にアナタこそ何者ですか？」

「それは・・・。」

そのとき背後から殺気を感じ咄嗟にその場か飛びのいた。すると先ほどまで胴があったところを剣が通り抜けていった。

「敵の増援……ですね……後2人程います、なのは気をつけてくださいね。」

「うん……わかった。」

すると、シグナムと呼ばれたヴィータと呼ばれた襲撃者を開放しこちらに向き直った。

「現状4対2数では勝るが、やつの力が未知数だし、2対1なら勝算はあるだろう。」

「ああ！負けるわけにはいかねえんだ！」

そう言うとヴィータと呼ばれた騎士はなのはの方へ、シグナムと呼ばれた騎士はエリーゼの方へ向かった。

「できれば、引いていただけると嬉しいのですが。」

「それはできん、お前がリンカーコアを提供してくれるなら話は別だが？」

「それは、勘弁願いたいものですねっ！？」

全て言い終わる前に襲い掛かってきたのでギリギリだったが、何とか回避に成功した。

後数秒遅ければ致命傷を負っていたことだろう。

「安心しろ、殺しはしない。」

「その発言は物騒すぎますよ！」

つばぜり合いになりながらもそう言うと、一度突き放した。

その後も、激しい衝突を繰り返したが、途中なのはとの距離が離れすぎたため、急遽援護に向かうことにした。

シグナムも追いかけてきたがスピードにおいては若干の自信があり、振り切るため最速のスピードで飛んだのでどんどん距離が離れていくのがわかる。

そしてなのはの気配を探りながら飛んだ。

程なくなのはを発見した、既になのはは応急処置されていた。

「大丈夫ですか！？なのは！」

「うん・・・ユーノ君とフェイトちゃんとアルフさんが今戦ってくれている。」

「わかりました、あなたは私が守ります、なのでここから動かないでください。」

そう言うとなのはを守るため周囲の警戒を始めた。

しかし、状況は悪くなるばかりでヴィータとシグナム、と使い魔の狼が合流しフェイト、ユーノ、アルフも徐々に押され始めている。

「エリーゼちゃん、私がスターライトブレイカーでこの結界を壊すよ。」

「しかし・・・わかりました、私が発射まで援護します。」

フラフラなのはを支えながら射撃ポイントまで連れて行った。

《フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん私がスターライトブレイカーで結界を壊すから!》

念話で全員に伝えた後、スターライトブレイカーで射撃体勢に入っ  
た。

レイジングハートも破損しているため無事に発射できるか不安ではあるが、なのはとレイジングハートは撃つつもりのようだ。

チャージカウントも終わりなのはが放とうとしたときだった。

妙な気配を感じ振り返ると、おかしな光景が目に見えびんできた。

なぜなら、なのはの胸の辺りから腕が飛び出ていたからだ。

その後、一度引っ込んだ後再び今度はなのはのリンカーコア掴んで現れた。

「なのは!?!」

「スターライト・・・ブレイカー!?!」

スターライトブレイカーを放つと、結界は破壊された。

それと同時になのはは崩れるように倒れた。

## 第10章 新たな戦いの狼煙（後書き）

ここまで読んで頂きありがとうございます！

引き続き頑張って投稿していきますのでよろしくお願いします。

後、誤字、脱字等ありましたら、お手数ですが報告をお願いします。

## 第11章 新たな仲間！？（前書き）

第11章です。

遅くなりすみません、相変わらずグダグダですが、読んでいただければ幸いです。

## 第11章 新たな仲間！？

なのはが倒れた後、直ぐにアースラに転送され、そこからクラナガンの病院に搬送された。

検査が終わり、入出許可が下りると部屋の中に入った。

「なのは……すみません私が守るといふこと言っておいてこの結果で……ホントにすみません。」

エリーゼはなのはに頭を下げ謝った。

「ううん、平気だよ？頭を上げて？あんなの誰でも防げないよ。」

「いえ、しかしあれは完全に私の判断ミスです。」

「ホントもういいよ！あれは私が無理やり撃つて言ったんだから。」

などと、30分ほど言い合ったあと、お互いに悪かったという事でのなのはに強制終了させられた。

その後入れ替わりでクロノとフェイトが入っていった。

そして、アースラに向かった。

「リンカーコアの異常な萎縮……やはり一連の事件と同様の手口ですよ？」

「ええそうね……モニターにも守護騎士4人に第1級搜索指定口ストロギアの闇の書が移っていたから間違いないわね。」

リンディはそういつとどこか寂しげな顔になった。すると、背後から急に声がした。

「暗い話はヤメヤメ！大切なのは、これからどうするのか、でしょ？」

背後を簡単に取られたことにも驚いたが、それ以上に話に入って来た人物に驚いた。

整った顔立ちに綺麗な黒髪、青い瞳、比較的小柄だが歴戦の戦を乗り越えてきたような威圧感もある。

「なっ！ユンヌ、なぜここに！？いえ、寧ろ好都合・・・お前をここで・・・ムグー！」

《ダメでしょ、折角来たんだから、昔の事は忘れて仲良くやりましょ？》

《何の目的？》

《今回の闇の書のデータを取るため、って言うのが8割小さくなったアンタのデータを取るのが1割後1割はロストログアで生き返らせたアリシアの観察かな。》

ユンヌは微笑みながらそう言うと近くにあった椅子に座った。

「あら、仲がいいのね。」

「そんなことはありません！」

全力で否定しその場を去った。

「チヨット！待ってよ〜！！」

「なっ！？放しなさい！」

つかまれた肩を振り払いながら、部屋に戻った。

隣の部屋で驚いたが、特に問題はないのでそのまま部屋に入った。嫌な予感がするので一応部屋の鍵を閉める事にした。

そのままベットに倒れこむと、いつの間にか寝てしまっていた。

そして何かが落ちる音で目が覚めた。

既に消灯時間を過ぎていたため、廊下などの電気は既に消えており、常夜灯のみがついている。

エリーゼは起き上がると部屋の電気をつけるため、リモコンを捜した。

暫く捜していると、何かに躓いた。

「ヒヤッ！？」

自分でも情けないと思えるような声を上げ、転んだ。

転んだ先にリモコンを見つけ、電気をつけた。するとそこには、ユンヌがいた。

「ユンヌ！アナタなんでここに！」

「んあ？もう朝？おはよ、エリーゼ。」

まだどこか寝ぼけているユンヌだったがゆっくりと周りを見渡し、やっと自分が違う部屋に居ることに気付いた。

「あれ？何でエリーゼの部屋にいるの？」

「私が聞きたいんだけど？」

すると暫く座り込んで考え込んだ。

そして思い出したのか立ち上がった。

「そうそう！エリーゼと遊ぼうと思って部屋の前に来たんだけど鍵が掛かってたから、切り落として入ったんだった、そしたら、エリーゼがあまりにも気持ちよさそうに寝てるからつい私も寝ちゃったんだ。」

「アナタという人は……。」

あきれながら、そういうとユン又は苦笑した。

「これが持ち味だからね さっしてお仕事に行かないと……またねエリーゼ。」

「出来れば会いたくない。」

エリーゼはブスツとした顔でそういうとユン又は手を振りながらどこかに消えて行った。

するとすぐに召集がかかり、予め決められていた、場所に向かった。

そこには既に全員が集結していた。

この場所は自室から比較的遠いため、走っても時間がかかってしまう。

集合場所の変更の提案をしようとも思ったが、ここまではずっと廊

下続きなので、変更のしようがないことに気づきやめた。

「すみません！少し遅れました。」

「本来なら厳しく言うところなんだが、今回の召集は急だったし君の部屋ここから最も遠いからな、仕方ない。」

クロノはそういうと、座って待っているリンディのもとに行き、全員が集合した旨を伝えた。

そして、ブリーフィングが始まった。

今回は、アースラの修理と襲撃地点が地球を中心に、個人転送できる範囲内での襲撃が多いため、なのはの護衛や連絡の伝達もかねて地球のなのはの家の近くにベース置く事となった。

かくして、引越し作業が始まった。

フェイトも地球、それもなのはの家の近くと言うこともありどことなく楽しみでウズウズとした感じがみてとれた。

「楽しみですか？フェイト？」

「はい、その・・・少し。」

それから大体2時間ほどで作業は終わった。

終わるとフェイトはなのはやアリサに連れられ、どこかに言っしまったが、後は部屋に服などを入れるだけなので問題はないだろう。

フェイトが出て行く際アリサと一緒に行くか聞かれたが、荷物の整理が終わっていないので行けないため、断った。

それから30分後、服などの収納も終わったので少し付近を出歩く

事にした。

コンビニの位置や、町までの所要時間、デパートやスーパーの位置など回った。

それらを回り終わったところで、時計を見ると既に午後5時を指していた。

「さて、粗方の調べ物も終わったし帰ろう。」

そのまま、来た道を引き返した。

途中学校帰りの小学生の高学年らしき人がぶつかって来た。

すぐに謝ったのだが、なにやら言いがかりをつけ胸倉をつかまれかけたため、つい反射的に投げ飛ばしてしまった。

「デメエ、このやろう！」

とうとうキレたのか右手に拳を作りこちらに向かってきたが、所詮は素人隙だらけの拳を受け流し、相手の鳩尾にカウンターをいれた。カウンター見事に狙い通り少年の鳩尾に入り悶絶していた、その効果を確認し、人目が集まり始めたのでその場を離れた。

その後コンビニで飲み物を買って拠点に戻った。

## 第11章 新たな仲間！？（後書き）

ここまで読んでくださった皆様ありがとうございます！

引き続き頑張っていきます。

グダグダですが、読んでいただければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8337w/>

---

魔法少女リリカルなのは～Another Story～

2011年10月10日12時13分発行